

3 当科における腸管(型)ベーチェット/単純性潰瘍の検討

岩永 明人・横山 純二・河内 裕介
 本田 稔・鈴木 健司・青柳 豊
 本間 照*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 消化器内科学分野
 済生会新潟第二病院消化器内科*

当科における腸管ベーチェットおよび単純性潰瘍についてまとめたので報告する。対象の内訳は、厚生省研究班のベーチェット病診断規準によって、安全型2例、不全型9例、疑い12例、ベーチェット症状を全く伴わないもの2例であった。完全型および不全型をBD群、ベーチェット病疑いおよびベーチェット症状を全く伴わないものをSU群として、比較検討した。BD群の方が潰瘍の形態や分布、さらに経過についても多様性に富み、単純性潰瘍と相違があるように思われた。その治療については、成分栄養、5-ASA、コルヒチン、ステロイド、免疫調節剤等が使用されてきたが、その効果については十分とはいえない。抗TNF- α 抗体については、今後の症例の蓄積が待たれる。穿孔等で緊急手術になることも多いが、その術後再発率は高率である。今後、術後維持療法についても積極的に考慮していく必要があると思われる。

4 潰瘍性大腸炎に合併したストーマ周囲壊疽性膿皮症の1例

堅田 朋大・岩谷 昭・山崎 俊幸
 須藤 翔・前田 知世・池野 嘉信
 松浦 文昭・横山 直行・桑原 史郎
 大谷 哲也・片柳 憲雄

新潟市民病院消化器外科

今回、我々は潰瘍性大腸炎に合併したストーマ周囲壊疽性膿皮症(Peristomal pyoderma gangrenosum:以下,PPG)に対し、ステロイドの全身投与が有効であった1例を報告する。症例は41歳、女性。平成13年2月潰瘍性大腸炎(全大腸炎型)を発症した。ステロイドを含む内科治療

では奏功せず、症状の増悪を認めたため平成22年6月25日腹腔鏡補助下結腸垂全摘術および上行結腸人工肛門造設、粘液瘻造設術を施行した。術後6日目頃よりストーマ周囲に疼痛を伴う潰瘍が出現。ストーマケアに努めるも潰瘍は拡大しPPGと診断された。ステロイド増量により潰瘍は縮小、疼痛も軽快した。発症後5ヶ月現在、ステロイド減量中であるが症状の再燃は認めていない。炎症性疾患のストーマ周囲の炎症にはPPGを念頭において治療に当たることが重要と考えられた。

II. 主 題

1 当科における潰瘍性大腸炎の長期予後

寺島 哲郎・須田 武保・番場 竹生
 日本歯科大学新潟病院外科

【はじめに】潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘、回腸囊肛門吻合術のQOLは評価が難しく、また長期的な予後については不明な点も多い。今回我々は排便機能を中心に術後の長期予後につき術式(1期、分割)間で比較検討した。

【対象】2003年から2010年1月までに当科にて潰瘍性大腸炎に対し大腸全摘、回腸囊肛門吻合術を施行した10例。(W回腸囊8例、J型回腸囊2例)

【結果】1期手術および2期手術間で排便回数、日中夜間の便の漏れ、止痢剤などの投薬においても両群間で大きな差は認めなかった。また術後合併症では腸閉塞が4例認め(1期1例)うち1期症例に対し腹腔鏡下にて手術施行された。

【まとめ】少数の経験例であるが、1期的大腸全摘W型回腸囊肛門吻合術の術後経過は良好であり、潰瘍性大腸炎手術の選択肢の一つになると考えられた。